
小生にての情報。

Grim Reaper

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小生にての情報。

【Nコード】

N5603Y

【作者名】

G r i m R e a p e r

【あらすじ】

身辺情報屋・小笠原となぞの転入生・神無月。二人の出会いによって、学園はゆっくりと、しだいに早く動くようになっていく……。果ては、天園となるか、獄となるか……

裏で支配する生徒会という組織。それに対抗しようと出来た委員長特別会。その存在達は小笠原らにどのように影響するのか……

第一羽・天使と神の邂逅。

人。

様々な秘密をもち歩く、奴らを信頼しろというのが無理なのである。

小生が卑劣なのではないのだ。

しかし、信じあえるのを夢見ている。

可笑しいのなら笑ってくれたまえ。散々人を化かしておいて、その言い草、と。

H A H A H A

「小笠原君。手伝ってくれる？」

廊下にて、少年が少女に引き止められる。

少年はコクリと頷き、少女の持つノートを六割ほど抜き取った。

「ありがとう」

満面の笑みを浮かべて、歩き出す彼女に、少年はニコリと笑い返し、後に続いた。

しかし、放課後にも関わらず人の波が出来ており、教員室に着くのに、十分程かかった。

「なんなんだろうね？」

不思議そうに人だかりを見つめながら、少女は誰にともなく呟いた。

一方の少年は、先ほどの完璧な作り笑いを浮かべながら、少女を置いて立ち去るのだった……。

信頼。

これは世にも大切な物だと小生は思う。

お金というのもこれに影響するものである。信頼という二文字がなければ所詮原価十円程度のただの紙切れだ。

それに、これがあればいろんなところに潜り込めることができる。それこそ小生のやり方なのだ。信頼させ、情報を引き出し、秘密裏に情報の交換をする。

余談だが、六次の隔たりという仮説は知っているかい？

「人は自分の知り合いを6人以上介すと世界中の人々と間接的な知り合いになれる」という仮説なのだが、どうやら小生の仕事には向いてなくてね。

小生は世界より、小生の身の辺の情報をより多く集めたいというに……。

しかし、小生は対人能力がないといってもいいほどだ。だから情報収集は骨が折れる。だって、

え？そんなことより、学園のことを知りたい？

む。やはり僕には持っていない香りを持っているね。

そうだなあ、唯一のことは、教員の影で、生徒会という機関がこの学園を牛耳っていることだなあ。

か
み

「えーっと、こちらは転入生かんなづきの神無月かい 戒くんです」
教員に紹介され、俺は一礼した。

が、教員のなにか言いたそうな顔で口を開く。

「よ、よろしく」

流石俺！素早く察せたぜ！

い、痛っ！目にゴミが入った！俺はまぶたを開いたり閉じたりしてみせた。両手は何故か持たされた教科書にふさがれていたのだ。でもそれは客観的に見たらウイंकに見えたことだろう。

空気の流れがおかしくなった。

「ん……」

空気をなおそうと口を開こうとした正にその時、異様なものが飛び込んできた。

ある一人の生徒だったのだが。

その体軀は細く優美で、男子生徒というのは躊躇わせるものだった。が、問題は顔である。別に不細工というわけではない。全体的に見たら、目立つところはない。それゆえに、一つ一つが整った形をしている。だけど、気持ち悪い。

目を細めて、楽しそうに見える笑顔。不愉快だ。

やめて、もらおう……

「えーっと、神無月さんの席はあそこです」

さされた席は

天使

ん。面白いのが入ってきたねえ。

小生のオーラに気づいたみたいだし、あの子自身にもオーラがあるようだ。

近づいてくる彼に、今までとは違う鋭い視線をぶつける。

視線を小生から逸らしていた彼は、びくっと身体を震わせる。

む。

人物判断能力、危険察知能力。あとは情報処理能力だけで、いい人材になる。

「あ、あの……」

「ん？」

話しかけ方を迷っていたところに彼が話しかけてきてくれた。

「あの、気持ち悪いです。笑顔。やめてください」

ほう。面白い。

決断力もある。とな……

いける。

このままいけば、学園を牛耳れるぞ……

第二羽・羽を得るのはどちら様？

天使

「なにになに？生徒会について詳しく教えろ？」

正面で、しきりに頷く神無月とやらを見つめる。

「小生の情報はそれなりのもので移動する。君には情報を手にする価値があるのかい？」

小生は少し意地悪な言い方で相手を試す。

これで引けばそれまでだ。

すると、神無月がカバンから何かを取り出し、小生に渡してきた。

「こ、これは！バートン社のチョコレート！」

バートン社はチョコレート界でも最高峰と謳われる代物である。

こ、こんなレア物、小生も初めて見たよお。

「生徒会というのは、圧倒的権力をふりかざし、この学園を支配している。それにより、無惨なことになった例もある。目的の為ならなんでもする、そんな組織だが、顔だけはいい連中共が組織しているため、ファンという形で強大な組織の一部となっているため。こちらでは対処に少し気をつけねばならない所がある」

はっ！

興奮のあまり饒舌になってしまったよお。

「それで……？生徒会はどんな活動をしている？」

神無月の顔が陰しくなる。

「それなんだけどねえ。小生のラインを使っても。生徒会の内部には中々到達しない。さすが、というだけだねえ」

かみ

「生徒会。やはり打つ手立てはないのか……」
そう沈む。

「ん。しかし、方法はあるよぉ？」

「んー。と顎に人差し指をあて、元々細い目を一層細くしながら小笠原は言った。

「それは、なんだ？」

「生徒会。さつきも言ったとおり、強大な組織。でもねえ、強大な組織には反発する組織が存在する。必ずねえ」

そういえば、そうだ。

小笠原は一口チョコを含んだ。

「そして、君は運がいいようだねえ。これ」

そう、渡されたのは委員会立候補者記述書だった。

「委員会？それが生徒会に反発する組織なのか？」

俺は思いついたことをいつてみた。かなり確信はあったのだが、小笠原は神妙な顔でかぶりを振った。

「九十点だねえ。そのままじゃ、生徒会には反発組織があるのがバレてしまう」

そこでいったん話を止め、一口サイズになったチョコを口に放り込んだ。

「んぐ。てか、もうバレてしまったんだよねえ。で、一層生徒会は委員会を厳しく取り締まった」

「それじゃ、どこに反発組織が？」

「む。委員会だよぉ？話し聞いてなかったのかな？」

二人の間を風が通り抜けた。

「えーと、委員会では無理じゃなかったんじゃないか？」

「そう、無理。でも、組織があるのは委員会」

自信満々の顔で言う小笠原。

俺は多分、訝しげ。

「わかってない顔だねえ。委員会その長はそれなりの信頼を得ている。生徒会からも、その委員の生徒たちからも。それらが集まった

ら、最高の反発組織が出来るのではないか？しかし、取り締まりは厳しい。見つかるのも時間の問題だろう。今年が最後になるかも知れない。委員長特別会合……」

そう呟き、小笠原は立ち上がった。

「その紙は今週中が期限だ。小生も出すつもり。ラッキーボーイの君はどうする？」

小笠原は二ヘラーと顔を歪め、スキップ調で教室を出て行った。
今週中……明日までじゃん……。

「なんだ！これ！立候補者数があまりに少ない！奴らに気づかれたか！」

《生徒委員長 瀬野》が手元の資料を床に投げつけた。

「苛立つな。醜い顔がもつと醜悪になる」

「なっ！」

そう返すのは《広報委員長 白鳥》

「やめてください！うわぁ！黒板消し二つの合体技、チョーク煙だ！けほっ」

仲裁に入ろうとしながらも、逆に被害にあっているのは《風紀委員長 追川》

「仲良くしなさいなあ。それと、生徒会はまだウチらのことには気づいてない模様ですよ」

キーボードをタイプしながら、嘆息気に呟くのは《会計審査委員長 紗江島》

そのすぐ後、カツカツと、上履きの物ではない音が会議室前廊下に響く。

委員長らは姿勢をただし、自分の席に静かに腰を下ろした。
ガラガラ

「あら、もう揃ってるのねえ。それじゃ、始めましょうか……天園を獄に変える者の審判を」
『御意』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5603y/>

小生にての情報。

2011年11月23日16時45分発行